

【高専卒業から早40年】

11期生(昭和52年工業化学科卒) 白石 文秀

今更でもないが、最近、月日が矢のように過ぎ去ることを改めて実感する。高専を卒業して来年で40年。

数年前から筋力が衰え始め、もはや天神山を疾駆した頃の勢いはない。一ヶ月ほど前に職場のソフトボール大会で20歳代前半の若者に交じり2試合を投げた。

高専時代にボート部で鍛え上げた強靱な肉体のイメージが脳のどこかにあり、昔と同じ調子で我武者羅に100球近くを投げ、翌日ぎっくり腰になってしまった。

やばい！体力が加速度的に衰えている。しかし、外見の老化はいつも若者からエキスをもらっているため、同世代に比べて5から10歳ばかり若く見られることが多い。これには損得がある。誰でも「若々しいですね」と言われると悪い気分にならないが、年下に見られタメ口で話されると気分が悪い。こんなとき、しばらくして「もうすぐ還暦を迎える」と伝えることにしている。

相手の表情の変化を観察するのが楽しい。

現在、私は教育の名のもと若者の労力にすぎりながら研究論文を書く日々を送っている。いつもストレスを掛けない苦悶ができるため、脳の衰えが遅いことに感謝する。高専卒業後運よく国立大学へ編入し、その後他大学大学院へ進学して博士号を取得した。

1984年に教員となり、しばらくして佐世保高専工業化学科(現物質工学科)の先生方の計らいで非常勤講師として招聘され、以来5年生に酵素工学の集中講義を行ってきた。卒業生であるからこそ学生とすぐに打ち解けやすいという利点を利用した講義を行っている。

1990年代初めから続く少なくとも毎年1回の高専訪問で、20年以上にわたる佐世保高専の変貌過程を傍観することができた。校舎の増築、恩師の退職や死、高専学生気質の変遷など。自分だけ得たようであり、なんとなく幸せを感じる。5年ほど前に私の学生時代の最後の教員が定年退職されたとき、私の高専時代に幕が下りたと感じて寂しくなった。

学生気質はどのように変わったのか。私の時代に女子学生は数名しかいなかったが、現在はクラスの2/5を占める。そのせいか現在の学生は平均的におとなしく感じる。男子学生は前より紳士的で、粗雑さがなくなっている。以前はやる気がない、あるいは眠そうな顔を見たらよく叱責したものだが、この頃は歳を重ねたことで対応が上手になり、学生ではなく自分の講義方法に問題があると反省するようになった。

久しぶりに出席した11月のOB会で数年前に卒業したという学生に私の講義について尋ねたところ、講義を受けたことさえ記憶していないとの答えにいささか無力感を持った。2000年以降、教員の中に佐世保高専はもとより高専卒業生が含まれるようになった。



共同研究先ジョージア工科大学研究室メンバーとともに

2010年には卒業生である中尾校長が着任された。高専教育の良し悪しを理解した者が在校生の教育や指導を行うのは大変良いことであると思う。就職や進学を選択において教員のアドバイスはまさに宝である。

私の場合、恩師から多くの叱咤激励を受けて進学を決めた。若い時の経験は何事にも代え難い。大学での専門科目の多くは高専履修科目の復習であったので、大学入試で入学した学生よりも呑み込みが速かった。

学問に情熱を燃やすエネルギーを十分に残した状態で大学へ進学したこともよかった。高専での学生実験の豊富さは大学と比べものにならない。

この経験が私の大学や大学院、そして現在の研究の大きな礎となっている。

そうかといって、高専教育を百パーセント称賛するつもりはない。もし普通高校を選んでいたら大学へ簡単に進学でき、人生が大きく変わったに違いないと思われる。途中で頓挫した同級生がいた。

私の場合、たまたま高専教育に馴染みやすい性質だったのだと思う。私の教員室本棚に矢野健太郎監修「高専の数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を置いている。これらは私のこれまでの研究活動に大いに役立った。

本を眺めると、難解だった数学や物理に怯えた45年前の高専入学仕立ての頃をついこの間のように思い出す。人生は短いものだと思ってしまう。

プロフィール

1977年に佐世保高専工業化学科を卒業し、広島大学工学部へ編入、九州大学大学院工学研究科修士課程、博士課程修了後、九州大学工学部助手。

ミシガン大学医学部博士課程研究員、九州工業大学情報工学部助教授、2005年から九州大学大学院農学研究院教授、現在に至る。専門は化学反応工学。

現在の研究テーマは、光触媒を利用した空気および水浄化プロセスの開発、大規模代謝反応システムのコンピュータ解析など。趣味はクラシックギター演奏。